The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	日韓における軍隊敬語の実態
Author(s)	姜, 錫祐
Citation	待兼山論叢. 日本学篇. 1995, 29, p. 31-48
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/56535
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

日韓における軍隊敬語の実態

姜　　錫　祐

1　はじめに

日本の旧軍隊と韓国の軍隊は、外部との交流がほとんどなく、強い規制によって上下関係を保持する必要があるという点で共通する。それゆえ、軍隊そのものの性格がよりよく保持されていたと思われる両集団を比較することは、両言語がもつ敬語の性格を的確に把握するために大いに意義があるといえよう。

本稿では日本の旧軍隊と自衛隊、並びに現在の韓国の軍隊を調べることにより、戦前の日本軍から戦後の自衛隊における敬語の変化、また両国における軍隊敬語のシステムや使用者の意識などをあきらかにしたい。さらに、軍隊では同じ事がらを伝える際に相手の階級が変わることに伴って（自分と相手との上下関係により）敬語使用がどのように変わり、それが言語形式面にどういう形で現れるかの実態を表現主体の意識を通して解明していくことにする。

2　調査について

2.1　調査期間

日本側：旧軍隊　1994年１月～12月、1995年７月

　　自衛隊　1994年10月～12月

韓国側：韓国軍　1994年８月～９月

2.2 調査対象とインフォーマントの条件

日本の旧軍隊の場合は、軍隊経験のある高年層の人々を調査対象としている。質問項目の設定には少々複雑なところがあったため、面接調査の際になかなか質問の意図がわかってもらえなかったインフォーマントもいた。

〔表1〕 インフォーマントの軍別構成
（数字：人数）

	日本		韓国
	旧軍隊	自衛隊	韓国軍
陸軍（陸上）	37	7	82
海軍（海上）	3	1	1
空軍（航空）		3	2
	40	11	85

なお、自衛隊の場合は、現在自衛隊で勤めている自衛官を対象として調査を行った。

一方、韓国側の調査は、兵役義務を終えた大学生を対象とし、さらに、できるだけ記憶の鮮明な者のデータを採るため除隊して3年未満の人をインフォーマントの条件にした。調査を実施できた人数とインフォーマントの軍別構成は〔表1〕のとおりである。

〔表2〕 インフォーマントの出身地別構成

		出身地（人数）	総人数
日本	旧軍隊	大阪府(17)，福井県(6)，富山県(4)，岐阜県(3)，宮城県(3)，神奈川県(2)，長野県(2)，青森県(1)，大分県(1)，北海道(1)	４０人
	自衛隊	愛知県(2)，茨城県(1)，栃木県(1)，和歌山県(1)，高知県(1)，愛媛県(1)，広島県(1)，山口県(1)，島根県(1)，熊本県(1)	１１人
韓国	韓国軍	忠北(61)，ソウル(13)，忠南(5)，全南(4)，京畿(2)	８５人

〔表2〕は、それぞれのインフォーマントの出身地域と人数を示したものである。

2.3 調査の内容及び調査法

調査の内容としては、日本・韓国共に第三者敬語に関する項目を設定した。調査ではまず、在隊当時（あるいは現在）自分が属している部隊の実際の上官や部下の名前を挙げてもらった。そこで、聞き手と話題の人物を決め、それぞれの聞き手に対して話題になる人物をどのような敬語形式をもって言うのかを尋ねた。しかし、どうしても実名を思い出せないインフォーマントには、仮名を使い、想定する人物の上下関係を充分確認した上で調査を進めた。

調査は日韓共に原則として面接調査法で行った。韓国での調査は筆者が全く違う部隊出身のインフォーマント2～3人と話し合いながら、互いの共通点や相違などをあげていくという比較討論法で行った。一方、日本では、インフォーマント個人の内省に基づく個別面接調査法で行った。

3 戦前の日本軍と現代の自衛隊における敬語

軍隊においては、二人の人物の間で交わされることばづかいを聞くだけでその両者の上下関係があきらかにできると思われる。しかし、単に話される会話を聞いてその上下がわかるということは、敬語が発達している言語社会ではそんなにめずらしいことではない。ところが、日本の一般社会での敬語は年齢、親疎関係、学歴、またはウチ・ソト関係などといった基準が待遇表現の決め手になるのに対して、軍隊の中の敬語は主に階級と入隊時期がその決め手になる。この点が軍隊敬語の大きな特徴である。軍隊では言語形式がもっとも軍律の基本となるため、軍人はことばづかいに常に気を使っている。もし間違えたりすると厳しく責められることになる。

このような軍隊敬語は、現代自衛隊にはなく、外部とのかかわりがほとんどなくしかも徴兵制だった戦前の日本の軍隊にこそあてはまる話であろう。つまり、自分の職業を求め志願する現在の自衛隊には、たとえ軍隊の性格を持っているとはいえ一般社会との交流も多く昔ほどの厳しさはほとんどなくなっているように観察される。

軍隊敬語あるいは自衛隊の中の敬語については先行研究がほとんどないように思われる。ただし、敬語の専門書などにはこれらについて若干触れたものがある。ここでいくつか紹介してみよう。

現在、あらたまった行事や儀式などの場合をのぞいてはほとんど耳にすることのない「殿」が、旧陸軍では上官を呼ぶとき「田中大佐殿」のように階級に付く尊敬接尾語として用いられた（櫻井（1983）に詳しい）。また報告するときには文末に「であります」体が用いられていたこと、さらに現在の共通語ではみられないが、一人称で「自分」が使われていたこと、などはよく知られている。敬語の運用法に関して触れたものは少ないが、三上（1972）は、旧軍隊の敬語体系について、

> 配属将校の人から聞いた古い記憶だが、たとえば士官（尉）Hが将軍Aに向かって言う場合には上長官（佐）をも呼び捨てにする、といったような礼法であった。

というふうに述べている。

しかし、この三上（1972）の記述が戦前の日本軍全体の敬語体系を述べたものとするには少々疑問が残る。

本稿では、戦前の日本軍と現在の自衛隊における敬語体系について第三者待遇表現を中心に述べたいと思う。調査項目はいずれも＜聞き手に、第三者が今‘いない’ことをどう伝えるか＞に統一した。設定した上下関係は、以下のとおりである。

質問①：最上官に上官のことをいうとき

質問②：上官に部下のことをいうとき

質問③：部下に上官のことをいうとき

質問①の回答結果、旧軍隊では、最上官に対してその場にいない上官のことをいうときにインフォーマント40人の中、ほとんどの人が敬語表現を用いていることがわかった。これらをもっと詳しくみるために、呼称に現れる敬語表現と述部の存在表現に現れる敬語とに分けてみることにする。

まず、呼称はふつう姓に階級をつけ、さらに接辞「殿」をつける形になっている。ところが、場合によっては姓を省いて階級だけに「殿」をつけることもある。回答を見ると呼称については、40人中37人が階級に「殿」をつけ、上官に対して敬意を表している。しかし、接辞「殿」の使用においては、陸軍と海軍とで相違がみられ、陸軍では必ず階級に「殿」をつけるのに対して、海軍の場合は如何なる場合でも「殿」をつけないことが特徴的である。呼称の部分で「殿」をつけないと回答した3人はすべて海軍出身者であった。一方、現在の自衛隊においては、旧軍隊の海軍と同じく、殿をつけないことが明らかになった。なお、現代日本の一般社会における「殿」の使用は書きことばに見られるものであって、話しことばの世界ではあらたまった行事や儀式の場以外にはほとんど使われない。

次に、述部では話題の人物に対する待遇表現としてどのような形式が用いられるのかをみよう。

対象となるのは、「ここにいま○○はいない」における「いない」の部分の表現である。この存在表現の場合、調査者が例として用意していたのは、具体的には、イマセン、オリマセン、オラレマセン、イラッシャイマセンのような形式である。しかし実際の場面となると、上にあげた表現形以外にも「巡察中である」とか「会議中である」とか「外出中である」などといった待遇的にニュートラルな表現形が用いられる可能性が多い。そ

うなっては最上官の前で話題の人物の上官をどう待遇していたのか、という調査の趣旨とは離れるため、ニュートラルな表現を用いるインフォーマントには用意してあった選択肢を示して答えを求めることにした。

〔表3〕 存在表現形式

（数字：人数）

表現形式	旧軍隊	自衛隊
イマセン	1	4
オリマセン	6	4
オラレマセン	33	3
イラッシャイマセン	0	* 1
総人数	40	11

（*は併用を示す）

〔表3〕は、質問①の回答結果に基づき、旧軍隊と自衛隊におけるそれぞれの存在表現についての使用者数を示したものである。

旧軍隊では存在表現として「オル」の否定の敬語形「オラレマセン」が一番多く用いられ、それ以外には「オリマセン」が6人、「イマセン」と答えた人が1人いるだけであった。ここで注目したいのは、旧軍隊において「れる・られる」敬語が非常に多用されていることである。すなわち、当時軍隊の中では「いる」の尊敬表現「いらっしゃる」形よりは「れる・られる」敬語が一般的であったと認められるのである。

一方、自衛隊では表現形式にばらつきがある。旧軍隊ではまったく用いられることのなかった「いらっしゃる」形を用いる人が1人いた。現代の自衛隊の中で「いらっしゃる」形が使われているかどうかという点について、面接調査の際に感じた印象では、もっと多く、また地域によっては広く使われているようである。

なお、旧軍隊での「れる・られる」敬語の使用については、西日本は「れる・られる」が使われる地域が多く、関東は「いらっしゃる」の使用頻度が高い地域であるため、地域差があるのではないかと思われた。しかし、西日本出身者だけにとどまらず、関東出身者にまで調査対象を広げた

結果でも出身地域による相違はまったくみられなかった。

それでは、なぜ旧軍隊は「れる・られる」敬語が多く使用されていたのか。逆に「いらっしゃる」形は、なぜ使われていなかったのか、という疑問が残る。「いらっしゃる」形が使われなかった理由について、「いらっしゃる」形は“女性語<女っぽい>”“民間人クサイ”また“商売ことば”などのイメージがあったから、というインフォーマントの内省があった。ここで「れる・られる」敬語と「いらっしゃる」の歴史についてみてみよう。

江戸時代後半から文献に用例が現われ始めた「いらっしゃる」は、明治末期から大正にかけて数的にも用法のうえでも確実なものになり、今日に至っているとされる。これに関連して、山西(1972)は、「「しゃる」は由緒あることばとはみなされないので、公式語ではなく、日常の話しことばとして「いらっしゃる」というかたちが使われたものとおもわれる」と述べている。さらに「いらっしゃる」は、発生後まもないうちに遊廓の人々の間でも使われていたことが文献で確かめられる。

これに対して、「れる・られる」はどうであるのか。金田（1972）は、「れる・られる」敬語について、

> 「れる」「られる」が文章的性格を帯びる性格の敬語ということだけではなく、話しことばのなかにおいても、受け身の言い方とまぎらわしいという欠点はあるものの、公のあらたまった対人関係という環境のなかで、わざとらしさがなく、適度の敬意を表わし、すべての動詞に規則的に付くこと、かつ簡潔な表現という、他の敬語表現にない性格が生かされて用いられてきていると思われる。女性にあまり好まれて使用されないというのも、出自が文章語であるため、形にはまった規範意識が先立って、日常のくだけた会話文のなかには受け入れがたいからであろう。

という。

「れる・られる」敬語が比較的古い歴史をもっており、さらに明治以後には標準語という規範意識の中で育てられてきたことばであること（土屋

(1974)参照）などを検討すれば、旧軍隊のように堅苦しく、形式を重んじる社会には最適の敬語だったのかもしれない。

ところで、旧軍隊と自衛隊における敬語体系についてみると、自衛隊では一定した体系がみられないのに対し、旧軍隊では最上官の前で上官のことを話題にするときに、自分より上の上官に対して尊敬語を用いていることがあきらかになった。三上（1972）の記述とは正反対の結果である。なお、このような状況は、戦前の日本軍（陸軍）を舞台として、営内における兵士たちの生活を生々しく描いた小説『真空地帯』（注：作者野間宏は3年間（1941年10月～1944年11月）に及ぶ軍隊経験がある）からうかがえる。

〔事例1〕聞き手（最上官）：岡本少尉（検察官）

話題の人物（上官）：軍曹

話し手：木谷上等兵

「林中尉殿のものであります」

「そうか」

「はい」

「何時（いつ）林中尉のものだということを知ったのか」

木谷の頭はこんぐらがった。彼は返事ができなかった。そして彼は青ざめた。「憲兵隊の取調べのとき、軍曹殿（ぐんそうどの）が……これが林中尉殿の持物であると言われました」

「よし。なぜ、そんなことに時間がかかるんだ」

〔事例2〕聞き手（最上官）：立沢准尉

話題の人物（上官）：大住班長（軍曹）

話し手：曽田一等兵

曽田、大住班長殿の公用で参りました。初年兵の安西が朝からいなくなっていま班のものが手わけしてさがしていますので、大住班長殿が

すぐ行って報告しといてくれと<u>いわれ</u>て、報告に参りました」

「なに！　安西が……逃げたか」准尉は片膝をたてて構えたまま言った。　（下線筆者）

上にあげた事例ではいずれも上官のことを最上官の前で報告するとき、話題の人物の階級に尊敬接尾語「殿」をつけて待遇し、さらに述語の部分でも尊敬語を使用して待遇していることがわかる。

一方、自衛隊では〔表3〕で示したように、一定した体系は見られない。調査時は旧軍隊の場合と同様に公的場面かつ改まった仕事の場面を想定して調査を行ったわけであるが、このようにばらつきのある回答が得られたのは、それぞれのインフォーマントが想定した場面が違っていたからなのかもしれない。

自衛隊の中の公的場面として考えられるのは、大別して、（1）共同訓練時の緊迫した演習場面、（2）会議の場面、（3）平常時の勤務中の場面、の三つである。この中で、（1）共同訓練時の緊迫した演習場面では、話題になる人物がその場にいるか、いないかを明確で速やかに話し相手に伝達することが優先されるものであって、話題の人物に対する待遇を考慮する必要はさほど感じられない。ただし、冷静な人であれば待遇表現に気を配ることもありうる。

それに対して（2）（3）の場面ではいずれも話の内容やまわりの状況（人的構成、その場の雰囲気など）により、待遇表現が変わりうるとみてよいだろう。（3）の場面は特にそうであると思われる。

今回の調査ではこれらの場面について、インフォーマントがどのように認識しているのか、また場面間の差異をどのようにみているのか、さらにはこのうちいったいどの場面を想定して答えたのか、といったことを判断するのはなかなか容易ではなかった。本調査で反省すべきところである。

しかし、次のような点も指摘しておきたい。戦前の日本軍の場合は自分の上官を“こう待遇すべきだ”という規範意識が明確にあったのに対し、現代の自衛隊では、そのような規範意識は一見ないようにみえる。というより、現代の自衛隊では、戦前の旧軍隊のような強固なきまり(規範意識)はほとんどなくなっており、一般社会とほぼ変わりがなく、そのときその場の状況に応じて待遇しているといってよいであろう。さらに、旧軍隊ではほとんどみられないが、自衛隊には最上官の前で上官のことを下げるということを意識の中で正しい待遇法だと思っていて、かつ話題になる上官を気にすることはないという人すらいる。このようなことから旧軍隊と現代の自衛隊における敬語運用の相違がはっきり現れるのである。

質問②は、上官に自分より下の階級のものの所在の有無を尋ねられ、いないことを報告する場合、どう答えるかという質問である。

旧軍隊の場合、呼称の部分では接辞「殿」はまったく現われず、さらには階級も省いて名前だけを用いることもある。このことから、「殿」は自分より上官の者のみに用いられるものであることがわかる。

また、述部では回答者のほとんどが「オル」の否定の丁寧語形「オリマセン」と答えている。ただし、「ミアタリマセン」と答えた人が1人、併用語形として「イマセン」を使うこともあるとする人が2人いた。

一方、自衛隊では、「オリマセン」が4人、「イマセン」と答えている人が7人いた。ここで注目したいのは、「イマセン」と答えている人の中には、待遇表現上間違いではないが、自衛隊の中でオリマセンを使うのはなんとなく不自然だと思う人が二人いることである。旧軍隊に比べ、「イル」形の使用が目立っていることが特徴的である。これは旧軍隊と自衛隊による差異なのか、世代による差異なのかについては明確にいえない。すくなくとも今回得られたデータをみる限りでは、「オル」と「イル」は、出身地と相関した現れ方をするわけではないので、方言による差異ではな

いと言えよう。

質問②の回答結果、上官に対して自分より下の階級の者を話題にするときは、旧軍隊・自衛隊共に尊敬形式は全く用いていないことが認められる。

次に質問③は、自分の部下を話し相手として質問①の上官を話題にする場合である。

まず、旧軍隊では、呼称で「殿」をつける人が40人中26人いる。この人数は質問①のときよりやや低くなっていることがわかる。なお、旧軍隊と自衛隊とで述部にみられる出現形式と回答人数は、次のとおりである。

旧軍隊		自衛隊	
オラレン	16人	イナイ	4人
オラレナイ	12人	オラレナイ	3人
オレヘン	7人	オラン	2人
オラン	2人	オリマセン	1人
イナイ	1人	イラッシャラナイ	1人
その他	2人	計	11人
計	40人		

これをみると、旧軍隊と自衛隊のいずれも、同じ上官を話題にするときでも、最上官に話すときと部下に話すときとでは相違が生じることが観察される。ただし、部下に話す場合には、まわりに話し手より上位の者がいれば、尊敬表現の使用率はさらに高くなることが予想される。

旧軍隊では、質問①、②の場面より、方言形の使用が多くなっていることがはっきりと見える。このような方言の使用について、旧軍隊では特に制約がなかったらしく、標準語を使うように教育されてはいなかったようである。ただし、上官に対していうときは、軍隊ことばあるいは軍隊用語（注：軍隊用語には、エンジンのことを気筒、ドライバーを柄付螺回し、

などといった表現がある。）で話さなければいけないという意識は強かったらしい。ここでいう軍隊ことばとは、節度ありかつ簡単明瞭なことばづかいを指している。たとえば、「であります」体で話すということである。しかし、海軍の場合は「であります」体は使わず、「です・ます」体で話したと、海軍出身回答者は言う。

従って、上官と話すときは節度ある軍隊ことばが使われ、同僚や部下などには自分の方言で話すことが多かったという。ただし、地域によっては方言の差がはげしいこともあり、互いのことばが通じない場合もあったらしく、そのときは、互いに共通語（東京語）でコミュニケーションを行ったという。共通語には丁寧なことばという意識があったようである。

ここで、質問①②③で現れた敬語体系をまとめてみると、旧軍隊では、聞き手が最上官であり、話題になる人物が自分より上の階級の上官であった場合は、尊敬表現が必ずと言っていいほど現われる。これに対して、自分の上官のことをいうときでも聞き手が部下であれば、上官に対して敬語表現を用いる割合は落ちる。

一方、上官に部下のことをいう場合に尊敬表現を用いることは全くないことが明らかになった。ただし、自衛隊の場合は、場面ごとに、あるいは話し手の意識が優先して待遇表現が変わりうると推測される。

4　韓国の軍隊と日本の旧軍隊の比較対照

韓国は基本的に徴兵制であるため、軍隊経験のない男性の数は非常に少ない。軍隊での生活は大変厳しく、規範からはずれた行動をとったり、間違ったことばづかいをしたりすると、強く責められることになる。しかし、極端な言い方をすれば、軍隊ではどんなことがあっても、あるいはどんなことをされても自分の意志で辞めることはまずできないのである。この点では戦前の日本軍もほぼ同様であろう。

さて、ここでは韓国の軍隊における敬語体系について、前節でみてきた戦前の日本軍の結果と比較しながら述べていくことにする。

調査項目は日本の場合と同じく、<聞き手に、第三者が今‘いない’ことをどう伝えるか>に定めた。

質問①は、最上官の前で上官のことをいうときであるが、話題になる上官をどのように待遇するのかについてみてみよう。

〔表4〕は、呼称と部述に現れた待遇形式をタイプ別に分別し、各タイプごとの回答人数とその割合を示したものである。

〔表4〕「○○は今ここにいない」
—最上官に上官をいうとき—

	呼称	述部	出現比率
A型	＋	＋	6(7%)
B型	＋	－	6(7%)
C型	－	＋	2(3%)
D型	－	－	71(83%)
総人数			85(100%)

〔凡例〕 尊敬表現あり＋　尊敬表現なし－

回答結果をみると、最上官を意識し、自分の上司に対して尊敬表現を避けるタイプの「D型」を用いる割合は全体の83%にもなっており、他の表現タイプにくらべて突出している。一方、話し相手とは関係なく話題の人物に対して敬意を示す「A型」を用いる割合はわずか7%にとどまっている。つまり、韓国軍では、たとえ話題の人物が自分より目上であってもその人よりさらに目上の人の前では尊敬表現を用いてはいけない、という規範意識が強く存在していることが認められる。言い換えれば、現在の韓国の軍隊では、固有の敬語法である「圧尊法」がより強く保持されていることが確認されるのである。

なお、このような結果は上掲の戦前の日本軍に存在した規範意識とは全く正反対のものであるといえよう。

次に、上官の前で部下のことを話題にする場合の質問②では、呼称にお

〔表5〕「○○は今ここにいない」
—部下に上官をいうとき—

	呼称	述部	出現比率
A型	＋	＋	40(47%)
B型	＋	－	17(20%)
C型	－	＋	4(5%)
D型	－	－	24(28%)
総人数			85(100%)

〔凡例〕 尊敬表現あり＋　尊敬表現なし－

いても述部においても尊敬表現を用いる回答者は一人もいなかった。

質問③は、自分の部下を話し相手として上官を話題にする場合である。その結果は〔表5〕のとおりである。

ここでの結果をみると、上官に対して尊敬形式を用いるA型が半分しか現れていない。一方、上官に対して尊敬形式を用いない（D型）割合が28%あることに注目したい。これは、おそらく調査時の場面設定による相違ではないかと思われる。つまり、部下に話すときには、公的場面とはいえ、上官がその場に‘いない’ことが強調されたための結果だと考えられるのである。もし、部下に話すときでもまわりに話し手より上位の者がいたとすれば、尊敬表現の使用率はさらに高くなることが予想される。

なお、質問②③で現れた結果は戦前の日本軍の場合とほぼ同様であることが確認された。

ここで、韓国の軍隊と日本の旧軍隊における敬語体系についてまとめてみると、日本の場合は、話し相手とはあまり関係なく、自分の上官に尊敬語を使うのに対し、韓国の場合は、話し相手が話題の上官よりさらに上官であれば、話題の上官に対して尊敬語を使わなくなることがわかる。このように両国の軍隊で逆の現象がみられるのには、それぞれに求められる上下関係の保ち方が異なるからであろう。

両国の軍隊でみられる上下関係の保ち方は、両国の一般社会での敬語の運用法（注：ここで対象とする「一般社会での敬語の運用法」とは「規範」

とされるものではなく調査や文献資料によってあきらかにされた実際の運用法を指す）と比較して決して特別なものではないと思われる。すなわち、それは両国の人々が上下関係を意識した場合の典型的な敬語運用法の現れだと考えられるのである。これらについて、もう少し具体的にみてみることにする。

日本の現代敬語は、典型的にはウチ・ソトといったものにより運用されるといわれるが、第三者敬語の運用法としては、ウチの人のことをソトの人に対して話題にする場合以外、すなわち、ウチの人同士またはソトの人同士を話題の人物と聞き手とにする場合には、聞き手とは関係なく話題の人物にあわせて待遇表現を選択することになる。この場合話題の人物が目上であれば尊敬語を使用し、目下であれば使用しない。

戦前の日本の軍隊社会を眺めると、旧軍隊は‘ウチがない社会’もしくは‘ウチしかない社会’といってよかろう。外部とのかかわりがほとんどない軍人たちは、階級によるタテ線の中のどこかの位置に配置され、自分以外のすべてはソトの人間になる、というのが前者の捉え方である。つまり、この捉え方では自分とソトしか存在しなくなる。後者は、軍隊全体を一家（ウチ）とみなし、ソトがないとする捉え方である。いずれの捉え方においても敬語の運用の面での現象は同じものとなり、一般社会と同様、話題の人物が目上であれば敬語を使用し、目下であれば使用しないということになる。

それに対して、韓国の一般社会での敬語は、ウチ・ソトとは関係なく主に上下関係（年齢）を原則的基準として運用される。その際、上の人のことをさらに上の人に話すときには、話題となる上の人の上げるか下げるかの選択を迫られることになる（注：勿論ニュートラルな言い方があるとは思われるが）。これには韓国の圧尊法という敬語法が深くかかわっていると思われるので、ここで徐（1984）による圧尊法の定義を示そう。

「待遇すべき二人を対比させ、より上の人を高めるために一方の人を低めて表現するものである」

こうみると、圧尊法の意識が韓国の軍隊で強く保持されているとみてよかろう。

一般の社会では、性、年齢、学歴、社会的階層、親疎関係、恩恵関係、などのさまざまな要素が複雑に絡み合って敬語を使ったり使わなかったりするわけである。しかしながら、軍隊はそれらの要素の一つ、すなわち、上下（階級）関係のみが際立った社会である。この上下（階級）関係という基準のみに従った場合に、日本の場合には上の人はともかく上げる、韓国の場合には最上官の前で上官を話題にするとき、上官を下げる、という相違がでてくるのである。

5　まとめ

本稿ではまず、日本側について、戦前の日本軍と現代の自衛隊における敬語の調査を通してその変化をみてきた。さらに韓国の軍隊の敬語の運用法を調査し、軍隊そのものの性格がよりよく保持されていたと思われる日本の旧軍隊との比較対照を行った。ここでは、主に日本の軍隊にみられた現象を中心に、以上でみてきたことをまとめてみよう。

戦前の日本軍と現代の自衛隊における敬語については、まずそれぞれの集団に存在する規範意識の強弱の差が指摘される。つまり、旧軍隊では軍律を乱さず階級による上下関係を保持するためのことばづかいに対する規制が強く、人々の中には規範意識が強く存在していた。それに対して、自衛隊では、敬語の使われる条件として、上下（階級）のみならず、日本の一般社会と同様にウチ・ソト、親疎関係といった要素が密接に絡んで関与しており、上下（階級）だけに限った規範意識は比較的弱まっている。こ

のような違いがあるため、両者の敬語体系の差をあきらかにすることは非常にむずかしいが、今回のように階級による上下関係だけを軸とする調査から第三者待遇法をみると、旧軍隊では上官のことを最上官にいうとき、話題の上官に対して尊敬語を用いるのに対して、自衛隊ではばらつきがみられ、さらには話題の上官を上げないことを正しい敬語法だと思っている人もいる点など、旧軍隊とはかなり違った面がみられる。

その他、自衛隊に比べて旧軍隊では次のような特徴がみられる。

1) 「れる・られる」敬語の専用

2) 尊敬接辞「殿」は、海軍では使用されず、陸軍のみ使用されたこと

3) 存在動詞としての「おる」形の多用

4) 旧陸軍では「であります」体、旧海軍では「です・ます」体で話されたこと

日本の旧軍隊と韓国の軍隊における敬語体系には正反対の現象がみられたが、これは両国の上下関係の保ち方が異なることから説明できる。

軍隊が敬語の運用法を比較対照した場合に特色を示すのは、この集団が階級による上下関係という基準だけを用いた特殊社会であることによる。軍隊は固有の敬語の運用法を規範的に作り上げた社会ともいえるだろう。

謝辞

本稿での調査では韓国側・日本側とも多数の方に御協力いただいた。韓国の軍隊では黄柱商氏にお世話になった。また、日本側の旧軍隊では北村昌子・崔絢喆の各氏に、自衛隊では小島潤一郎氏に調査に立ち合っていただいた。ここでお礼申し上げます。

参考文献

井上史雄(1983)「社会構造の変化と敬語の将来」『日本語学』第2巻1号明治書院

梅田博之(1974)「朝鮮語の敬語」『世界の敬語』敬語講座8明治書院

荻野綱男・金東俊・梅田博之・羅聖淑・盧顕松(1991)「日本語と韓国語の第三者に対する敬語用法の比較対照」『朝鮮学報』第141輯
金田弘(1972)「敬譲の助動詞」『品詞別日本文法講座助動詞(Ⅱ)』第8巻明治書院
金田一京助(1942)『増補国語研究』八雲書林
櫻井光昭(1983)『敬語論集』明治書院
真田信治(1973)「越中五箇山郷における待遇表現の実態」『国語学』93集
————(1990)『地域言語の社会言語学的研究』和泉書院
————(1994)「古典の敬語—社会言語学的アプローチ」『国文学解釈と教材の研究』第39巻10号学燈社
真田信治・渋谷勝己・陣内正敬・杉戸清樹(1992)『社会言語学』桜楓社
辻村敏樹(1968)「『浮世風呂』・『浮世床』の敬語」『敬語の史的研究』東京堂出版
土屋信一(1974)「江戸語の「れる・られる」敬語小考」『国語学』96集
三上章(1972)「敬語法のA線」『現代語法序説』くろしお出版
三宅武郎(1944)『現代敬語法』日本語教育叢書日本語教育振興会
山西正子(1972)「「いらっしゃる」考」『国語学』88集
花郎台研究所(1992)『韓国軍과国家発展』陸軍士官学校花郎台研究所、韓国
徐　正洙(1984)『尊対法의研究』翰信文化社、韓国
成　耆徹(1985)『現代国語待遇法研究』開文社、韓国

(大学院後期課程学生)